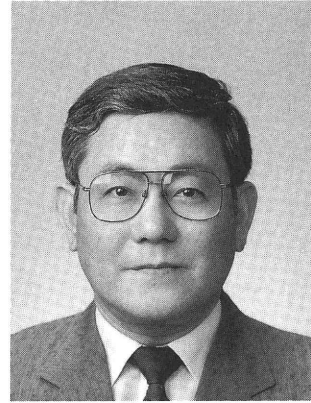


『幼児期からの学童期にかけての歯科的管理』

— 齲蝕予防から外傷・咬合誘導まで —

新潟大学歯学部教授

野 田 忠



略 歴

昭和41年 東京医科歯科大学歯学部卒業
昭和41～51年 東京医科歯科大学小児歯科助手
昭和51～54年 国立小児病院歯科医長
昭和54～ 新潟大学歯学部小児歯科学教授
日本小児歯科学会副会長
新潟大学歯学部附属病院長

著 書

子どものむし歯 グロビュー社
歯科・学校保健マニュアル 診断と治療社

〔講演要旨〕

小児歯科は、小児の口腔領域の健全な発育と健康の維持を目的としています。これを咬合の発育からみると、乳歯の萌出から乳歯咬合の完成、さらに永久歯への交換から永久歯咬合の成立までを、正常に経過させることです。この咬合の発育の過程を正常に経過させるためには、これを障害する異常や口腔疾患を予防し、治療することが必要となります。

幼児期から学童期にかけては、乳歯から永久歯への交換期にあたり、この時期を正常に経過させることは、人生80年の時代の基礎を作る上で、重要なことです。

今回の講演では、幼児期から学童期にかけての歯科的管理のうち、比較的遭遇しやすい、また、扱いに困難を感じやすい問題について、数多くのスライドを使って、解りやすく説明したいと思います。

〔講演内容〕

1. 第一大臼歯の役割と保護

第一大臼歯は幼児期の終りから学童期にかけて萌出してきますが、萌出の異常や萌出中からの齲蝕と、トラブルも少なくありません。咬合の中心であり、長い生涯使わなければならない歯の、学童期における管理をお話します。

2. 永久前歯の外傷

小学校低学年での永久切歯の外傷は、扱いが難しいものの一つです。根未完成歯の破折、脱臼について、処置法などを予後を含めて解説します。

3. 永久歯の萌出とその異常

永久歯萌出期の異常や不正は、それがほんの軽度のものであっても、永久歯咬合が完成する頃まで放っておくと、矯正治療など複雑な処置をしなければならなくなります。

下顎の永久切歯の叢生、上顎切歯の交叉咬合などの誘導法とともに、永久歯の萌出遅延、萌出方向の異常、嚢胞など、萌出異常の処置について、症例スライドを見ていただきながら説明します。